

令和七年度 第七回串本町短歌大会入賞作品

特選

○ ジェット雲一直線に空を切る 別の生き方あっただろうか

森悦子

○ 眠りつつ空をつかむか新孫よ難しき世も健やかであれ

堀口和子

○ 傾きて門閉されしつる草の花芽がからむ母校なりしを

清水雅昭

秀作

○ 久々に柚子を搾れば背後から「さんま寿司か」と亡夫の声きく

米津りつ枝

○ 故郷の変らぬ野山の写真撮り手紙と送る施設の姉へ

石垣実男

○ 雲間行くドクターヘリに運ばれる我身見つめんしかと目を開け

田中美智子

○ 幼日の遠景にあるげんげ田の向こうを走る蒸気機関車

田林和子

○ 言ひ過ぎしを言葉に出来ずつくし摘む母の手元をただ見つめぬつ

引地貞子

○ 美しき子らの歓語聞こゆなり明年閉づとう学舎の朝に

溝内 聡子

○ 手を出せば寄りくる牛の積まれ行く際の踏ん張り見ていた父子

岡田 敏朗

○ オウオウと鳴く牛蛙お前もか腹の底から泣いてみたいよ

田中 久恵

○ 思い出は8分音符が二度だけの休符だらけの君とのメロデー

山本 温

○ いにしえの人ら石積みし段畑に父母の植えたるみかん色づく

北野 惣一

○ 草ひけば貝殻ころころ転び出ぬはるかな夏の夢を留めて

中西 みよ子

○ ふる里の露おく野辺に曼珠沙華米寿に逝きし弟の顔つ

西村 良子

○ この庭にたれ植ゑくれしや藤袴九月こよひの月に咲き満つ

中根 寿美子

○ 難聴の耳に虫の音遠くして風の色にぞ秋立つを知る

若野 順子

○ 初秋の葉先に縋る空蟬の祈りのかたち我を捉ふる

籠田 くみよ